

2020年度

慶應義塾大学入学試験問題

経済学部

小論文

注意事項

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いたり、裏返したりしてはいけません。
2. 小論文の問題冊子は全部で8ページ（問題は2ページから4ページまで）です。試験開始の合図とともに全てのページが揃っているか確認してください。ページが抜けていたり重複するページがあったら直ちに監督者に申し出てください。
3. 解答用紙は1枚です。
4. 受験番号と氏名を、解答用紙の所定の欄に、必ず記入してください。
5. 問題冊子の余白は下書きに用いてもかまいません。ただし、1ページ目には何も書いてはいけません。
6. 解答用紙の余白、採点欄および裏面には何も書いてはいけません。
7. 解答は横書きです。
8. 字数をかぞえるとき、句読点も1字とかぞえます。ただし、算用数字は1マスに2つまで記入できます。
9. 問題冊子は、試験終了後必ず持ち帰ってください。

次の課題文1, 2を読んで, 設問A, Bに答えなさい。解答は解答用紙の所定の欄に横書きで記入しなさい。

### [課題文1]

北方地域において, 狩猟対象動物となる獲物の大群の出現は季節的である。したがって, 北方狩猟採集民の一年は夏と冬という規則的にくり返されるリズムにより特徴づけられる。夏, トナカイは出産のためツンドラへと北上する。そして, 冬になると, 越冬のためタイガへと南下する。繁殖活動は秋に行われ, トナカイは南下の途中, 川や湖を泳いで渡り, ツンドラとタイガの境界にあたる森林限界周辺に集まる。そして, 川や湖が結氷すると, 群れは森林の中へと移動する。

インディアン(注)は夏と冬のキャンプを設営する。夏のキャンプは漁撈活動の, 冬のキャンプはトナカイ狩猟と罟猟のためである。秋には, インディアンは南下してくるトナカイを迎え撃つため北上する。したがって, インディアンとトナカイはそれぞれ夏と冬に, 南と北という反対の方向に移動することになる。冬には両者の活動空間は重なり合い, ここでインディアンがトナカイを狩猟する。すなわち, インディアンとトナカイの生態的關係は, 毎年の規則的な空間-時間リズムによって特徴づけられるのである。

しかし, 狩猟者と動物との間の生態的リズムは, 永久に不変でもなければ保障されているものでもない。トナカイの移動路は年ごとに大きく変わる。また, 群れの大きさや越冬地域は, 積雪状況や森林火災の範囲に応じて変化する。インディアンは秋になるとトナカイを待つためにキャンプを設営するが, 彼らが毎年, 同じ場所でトナカイに出合える保証はない。もしトナカイが現れれば大量の肉が得られるが, もし現れなければ人びとは飢えることになる。北方狩猟採集民にとって飢餓は稀なできごとではない。

狩猟活動そのものにおける不確定性も一般的に見られる。狩猟活動とは狩人による動物の探索, 追跡, 接近, あるいは待ち伏せ, 屠殺, 解体, 運搬という一連の行動により構成される。狩人は動物の生態や行動に対応した狩猟活動の調整を行うが, それは必ずしも常に成功するとはかぎらない。狩猟の失敗, あるいは事故がその結果を不確定なものにしている。すなわち, 北方狩猟採集民は動物に大きく依存しており, 狩人と動物との生態的關係は規則的な時間-空間リズムを形成してはいるが, 同時にそこには不確定性が見られるのである。

もちろん, インディアンは人間と自然との関係の不確定性に対応する社会的, 生態的調整も行う。彼らは, 森林限界の近くにキャンプを設営する。一つのキャンプと別のキャンプとの距離は時に100キロメートルも離れていることがある。もし, キャンプの設営地の近くで季節移動してくるトナカイが水を渡れば, インディアンは殺せる限りのトナカイを狩猟することができる。これらの肉は後に, トナカイの移動路にあたらなかった場所でキャンプしていた人びとにも分配される。人びとは肉がなければ, トナカイの狩猟に成功した者から肉を自由に得る。狩人たちはお互いのキャンプを訪れて, トナカイの現れた地点に関する情報を交換する。また, 最初のトナカイが得られる

と、この情報は他の人びとにも伝えられる。

私は、アンばあさんの夫で71歳になるジョンじいさんが、この冬における最初のトナカイを狩猟したことを人びとに伝えるためだけに、キャンプから75キロメートル離れた村まで犬橇<sup>ぞり</sup>で往復するのを見た。彼の養子である少年は、この老人が「そうすることが好きだから」行くのだと説明した。ジョンじいさんは若い時にはいつもたくさんの肉をキャンプにもたらした腕のよい狩人だと人びとにいられていた。また、現在もそういわれるとジョンじいさんは笑って喜んでいるように思われた。したがって、ジョンじいさんの行動は、彼が腕のよい狩人だという威信を示すためと考えることもできる。

しかし、同時に彼の行動は生態学的に見ると、生存のための戦略的行動としての役割をも持つ。すなわち、移動するトナカイの位置に関する情報の速やかな伝達は、すべてのインディアンの狩人によるトナカイの生産量を最大化する。またその結果、肉の分配を通して他のキャンプの人びとの飢餓を防止することにもなる。すなわち、情報と肉の分配機構は、空間的-時間的に不均一に分布している大量の資源の獲得における生存戦略となっている。

(煎本孝著、『こころの人類学—人間性の起源を探る』ちくま新書、2019年より抜粋。なお一部の漢字にふり仮名をつけた。(注)は出題者による。)

(注) ここでインディアンとは、カナダ先住民であるカナダ・インディアンのうち、カナダ亜北極の北方アサパスカン語族に属する北方狩猟採集民のことを指している。

## [課題文2]

過去の成功や失敗に学びながら、目指すべき未来のヴィジョンを構想する時に、「分かち合い」の思想が重要となる。それは、既に紹介した私の大好きなスウェーデン語、つまり「社会サービス」を意味する「オムソーリ」の本来の意味である「悲しみの分かち合い」に学ぶことである。

人間は悲しみや優しさを「分かち合い」ながら生きてきた動物である。つまり、人間は「分かち合う動物」である。人間に対するこの見方は、アリストテレス (Aristotelēs) の「人間は共同体的動物 (zōon politikon) である」という至言にも通じている。人間は孤独で生きることはできず、共同体を形成してこそ生存が可能となる。「分かち合い」によって、他者の生も可能となり、自己の生も可能となるのである。

「社会サービス」をオムソーリだと理解すると、社会の構成員は自己の「社会サービス」のために租税を負担するのではなく、社会全体のために租税を支払うということになる。しかも、「分かち合い」は他者の生を可能にすることが、自己の生の喜びでもあることを教えている。人間の生きがいとは他者にとって自己の存在が必要不可欠だと実感できた時である。「悲しみの分かち合い」は、他者にとって自己が必要だという生きがいを付与することになる。

<中略>

生命を維持する活動である生活の「場」では、「分かち合い」の原理つまり協力原理にもとづかなければ成り立たない。そのため生命を維持する生活活動は、家族やコミュニティに抱かれて営まれる。つまり、「分かち合い」の原理にもとづく相互扶助や共同作業で営まれる。

したがって、市場社会で生産活動が競争原理にもとづく市場経済で営まれるといっても、生活活動は家族やコミュニティという協力原理にもとづく「分かち合い」の経済で営まれている。農業を基盤とした市場経済以前の社会では、生産活動も共同体の協力原理にもとづいて営まれていた。生きている自然に働きかける農業は、自然のリズムに合致する共同体の原理で営まれる必要があるからである。

ところが、農業の副業から誕生する工業が分離して自立的に営まれるようになると、生産活動が競争原理にもとづく市場経済に包摂されるようになる。工業は農家の副業としての家内工業から生まれてくる。それが都市に立地されるようになると、要素市場において土地、労働、資本という生産要素の生み出す要素サービスを取引することで、工業が自立してくる。

農業が生きている自然を原材料とするのに対して、工業では死んだ自然を原材料とする。綿工業であれば、農業が生産した綿花という死んだ自然を原材料として綿糸を生産する。しかも、工業では農業のように生命を育む大地という自然に働きかけるのではなく、人間が製造した機械に働きかけ、機械のリズムに合わせて生産活動が営まれる。

このように、人間を創造主とする対象に働きかける工業では、人為的行動として生産活動を完結できる。そのため工業では生産と生活を分離することが可能となり、競争原理にもとづく生産活動と協力原理にもとづく生活活動が分離していくことになる。

(神野直彦著、『分かち合い』の経済学』岩波新書、2010年より抜粋。なお下線は出題者による。)

## [設 問]

- A. 「分かち合い」は、人間にとってなぜ必要であると考えられるか。二つの課題文に共通する必要性を200字以内で答えなさい。
- B. 課題文2の下線部に「社会サービス」とあるが、これからの社会において、本文の意味での「社会サービス」の重要性は増すべきか、減るべきか。また、なぜそのように考えるのか。筆者たちの考えにとらわれず、あなたの考えを400字以内で自由に述べなさい。

## 下書き用紙

以下は下書き用です。解答は解答用紙に記入して下さい。

下書き用紙

下書き用紙

